

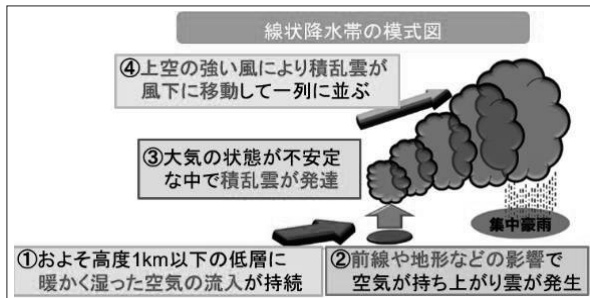
## 「線状降水帯予測」

気象庁は、線状降水帯による大雨災害の被害軽減のため、6月1日から線状降水帯予測を開始しました。線状降水帯による大雨の可能性を予測し、半日前からの予測情報を提供します。

今回は、「線状降水帯予測」について説明します。

### 1. 線状降水帯とは

線状降水帯とは、次々に発生した積乱雲により線状の降水域が数時間にわたってほぼ同じ場所に停滞し大雨をもたらすものです。線状降水帯が発生すると災害の危険性も高くなり、近年では毎年のように甚大な被害を引き起こしています。



### 【線状降水帯による最近の災害事例】

- ・平成26年8月豪雨（広島）
- ・平成27年9月関東・東北豪雨
- ・平成29年7月九州北部豪雨
- ・平成30年7月豪雨（西日本豪雨）
- ・令和2年7月豪雨

資料：気象庁 HP より

### 2. 線状降水帯予測の必要性

線状降水帯は台風などと比べて短寿命でありながら、短時間で記録的な大雨をもたらします。しかしながら、数日間にわたって移動する台風とは違い、事前に発生を予測することが困難であり、早めの避難や事前の対策に限界がありました。

そのため、気象庁では「線状降水帯予測精度の向上」を喫緊の課題と位置づけ、船舶 GNSS（全球測位衛星システム）による洋上の水蒸気観測等の強化や、大学等の研究機関と連携した予報モデルの開発を前倒しで進めています。

### 3. 線状降水帯予測の概要

気象庁は、これまでの線状降水帯の発生後の情報提供にとどまっていたところを、予報モデル開発の第一歩として6月1日より予測精度向上を踏まえた発生予測を開始し、大まかな地域を対象に半日前から情報提供します。

さらに予測精度を高めるため、大学等の複数の研究機関と連携した高密度な集中観測や、スーパーコンピュータ「富岳」を活用した開発中の予報モデルのリアルタイムシミュレーション実験など、産官学の連携の取り組みを一層強化していきます。

### 4. 大雨災害の被害軽減に向けて

線状降水帯のメカニズムは十分に解明されておらず、予測精度はまだ低いのが現状です。「予測は空振りだろう」「予測情報が出ていないから大丈夫だろう」といった油断をせず、各自が危機感を高め、しっかりと警戒することが必要です。

また、予測が的中した場合でも情報発信から短時間で状況が急激に悪化することも予想されます。普段から避難所の位置や避難ルートの確認、非常食や飲料などの備蓄、非常用持ち出し袋のチェックなど、日頃の防災対策が重要となります。

## 閑話ひとつ

◇今年3月の地震で被害を受け、一部区間で不通が続く阿武隈急行が6月下旬にも全線再開の見通しという記事を目にしました。また、その翌日には2011年7月の新潟・福島豪雨で被災し、一部区間で不通が続くJR只見線が10月1日に全線開通されるという記事を目にしました。どちらも自然災害による被害で、日常生活に大きな支障を与えていただけに地域の皆さまもホッとされていることと思います。特に只見線は被災から再開まで10年以上の歳月を要しており、喜びもひとしおかと思えます。

◇「夜明けの来ない夜はない」、「夜明けは必ず来る」、「待てば海路の日和あり」いろいろな表現があり、シェークスピアの「マクベス」でも「明けない夜はない」というセリフがあるそうです。

◇暗いニュースを多く目にする昨今ですが、少しでも明るいニュースに目を向けて、今日より明日はきっと良くなると信じて少し楽観的に過ごしてみたいと思います。 (TT)